魔理沙と霖之助

mosu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔理沙と霖之助

【Ｎコード】

Ｎ２６９３Ｙ

【作者名】

ｍｏｓｕ

【あらすじ】

魔法の森入り口に立地する古道具屋、香霖堂を営む森近霖之助。そしてそこへ入り浸るように訪れる霧雨魔理沙。そんな二人の話。

人間の里から魔法の森へと向かうその途中にある古道具屋。
立地条件の悪さから客足は殆ど無いものの、その古道具屋にはほとんど毎日のように普通の魔法使いの少女が訪れていた。
しかし、『店を訪れる』と聞くと買い物をしに来るように聞こえるが、彼女の目的は暇つぶしやあわよくば気に入った商品を勝手に持って行くなど、客とは思えない行動ばかりをとっていた。
この古道具屋、『香霖堂』の店主をしている青年、森近霖之助はそんな彼女の行動にいつも口では「客じゃないなら帰れ」などと言ってはいるが、なんだかんだで彼女との関係が気に入っていた。

そして、普通の魔法使いの少女こと、霧雨魔理沙は今日も香霖堂へと訪れていた。
魔理沙は商品の一つであるツボに座ると、霖之助へと話しかける。
最近こんな異変を解決しに行った。
霊夢のところに行っても茶菓子を出してくれない。
とりあえず茶と菓子を出せ。
と、細かい部分は違うもののいつもと同じような内容の話をしていた。
このままいつも通りの会話をして、それが終われば彼女が帰り、また明日同じようなことが繰り返される。
そんなことを霖之助は考えていたが、魔理沙のいつもとは違う一言で、この二人の関係は崩れてしまった。

「こーりんは誰かと結婚とかしないのか？」

その一言に霖之助はなんて返すか悩み、会話に沈黙ができる。
この言葉を放った彼女は、自身の発言とこの沈黙に内心しまったと

思ったが、この発言自体ある意味しょうがないものだったのかもしれない。

霖之助は数年前までは自身の店を持っておらず、魔理沙の両親が経営する道具屋で修行をしていた。
そのため魔理沙は幼少の頃によく霖之助と遊んでもらっていたのだ。
そして霖之助が自身の店を持ち、霧雨家へ来なくなった現在でも（といっても魔理沙はもう家から自立をしているが）それに似た関係は続いている。
つまり、魔理沙は幼少の頃から今までずっと霖之助と付き合ってきたのだ。
そんな彼女が微塵も霖之助へと好意を寄せない訳が無い。
その感情から、いつものように接している中でポロリと漏れてしまったのがこの発言である。

魔理沙はさっきの発言について、深い意味を込めたわけではなかった。
彼女自身自分の中の感情には気づいてなかった上に、思ったことを口にしてただけで、何故こんな発言をしたのかもよくわかっていなかった。
そして帰ってくるのは沈黙だけの中、彼女は非常にいたたまれない気持ちになった。

「僕はね、・・・」

やっと口を開けた霖之助に魔理沙は耳を集中する。

「君が知っての通り、僕は半分妖怪半分人間の半妖だ。
人間からしてみると僕の寿命は長すぎる。
だからといって妖怪から見れば今度は寿命が短すぎる。

半妖っていうのは中途半端な生き物なんだ。
つまり、僕は誰と一緒になったとしても自分が残るか相手が残るかだけで、結局悲しむものが出てくるんだよ。

だから、僕は誰かと一緒になるなんて考えていないよ。」

霖之助は最後に「まぁ、もとより相手もいないんだけどね」と言って湯のみをとり、お茶をすすった。

魔理沙は霖之助の話を聞き終えた後に疑問を感じた。
それは、霖之助の話の内容ではなく自身の話を聞く姿勢についてだった。
何故今自分はこんなにも霖之助の話を集中して聞いていたのか。
むしろ、ここまで人の話に緊張したことがあったのか。
そしてここでやっと自身の感情に魔理沙は気づいた。

（そうか・・・私はこーりんのことが・・・）

自分の持つ霖之助への好意に気づいた魔理沙は、霖之助の言葉を思い出し、頭の中で反芻する。

（自分か相手が残る・・・）

魔理沙の反応を待つ霖之助だったが、魔理沙は霖之助の言葉を聞いて黙ったため、今度は霖之助が沈黙の中で待つ番となった。
店の中でお茶をすする音だけが響き、普段はなんとも思わないこのを音が異様に大きく聞こえた。
沈黙から5分が経ち、反応のなかった魔理沙を見て霖之助は置いていた本へと手を伸ばそうとした時、魔理沙はようやく口を開いた。

「じゃあこーりんは、もし自分と同じくらい生きれる人間がいたら・・・結婚するのか？」

魔理沙の言葉を聞いてきょとんとした霖之助だが、彼はこう返した。

「そうだね。
そんな人がいたら、僕も幸せになれるかもしれないね。」

これでこの会話は終わり、このあとすぐに魔理沙は香霖堂を出ていった。
更にこの日を境に魔理沙が香霖堂を訪れる回数は大幅に減ってしまう。

―――――

そして数年が経ったある日のこと。

香霖堂のドアが叩かれたため、霖之助は返事をする。

「はい、どうぞいらっしゃい。」

「おっす、こーりん久しぶりだな。」

「なんだ、魔理沙か。
でも魔理沙がここに来るなんて久しぶりじゃないか。」

「そうだったか？
まぁそんなものはどうでもいいんだがこーりんが昔言ったこと、覚えているか？」

「昔言ったこと？」

「こーりんと同じくらいの寿命の人間がいれば結婚してもいい、って話だよ。」

「あぁ、そんなことを言った時があったね。
そういえば、それからだな。
魔理沙がうちにほとんど来なくなったのは。」

「覚えているならそれでいいんだ。」

「え？」

「私はあれからここに来る時間を削って命蓮寺に行っていたんだ。
あそこには私の同業者（魔法使い）がいるからな。
そこで魔法を教えてもらっていたんだ。
といってもさすがに簡単には教えてもらえず、数年かかったけどな。
」

「命蓮寺の魔法使い、教えてもらった魔法。
それってまさか。」

「そう、若返りの魔法だぜ。

ついでに言うと自分にだけでなく相手にもかけられるぜ」

「それじゃあ、あの日から来なくなったのって、つまり・・・」

「そういうことだぜ、こーりん。
いや、『あなた』って呼んだほうがいいか？
約束は約束、守ってもらうからな。」

その数日後、博麗神社で二人の式が行われた。
霖之助、魔理沙と共に交友関係が広かったため、式は小規模でもいいと思っていた二人ではあったが噂を聞きつけた幻想郷中の住人たちが集まり盛大な式となった。

～ＦＩＮ～

（後書き）

初めて小説というものを書いて見ました。
いわゆる処女作です。

やはり、小説は読むのとは違い書くのは大変ですね。
たったこれしか書いていないのに結構の労力でした。
文章もところどころおかしいかもしれません。
ですが、後悔はしていません。

別の物を書いてみるか、自分のボキャブラリーの乏しさに挫折するかはわかりませんが、もしこの小説を面白いと思ってくれた方がいたらそっと感想と言うなの応援をお願します。
今後の励みになるやもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2693y/

魔理沙と霖之助

2011年11月6日04時17分発行